

風俗や言葉に見る鈴虫

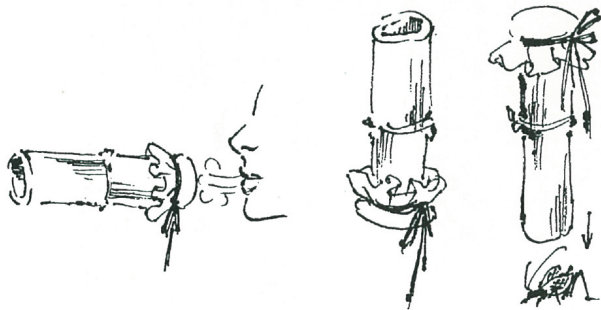
■虫合わせ

平安時代、宮中では、好みの虫をかごに入れて、虫の鳴き声ばかりでなく、姿の優劣をも競う「虫合わせ」ということをやっていました。現在みやぎのまつりでも鳴き声コンクールが行われていますが、そのほとんどは卵からかえした系統自慢の鈴虫に限られ、音色と振り数を競うもので、平安の昔の風雅な虫合わせとは大分趣きを異にしています。風流ということであれば、江戸時代には、俳諧などたしなむ町人が秋草の茂る小高い丘にごさを敷き、「虫聴き」の吟行を行ったとの記録があります。



■虫吹き

「虫吹き」は、昔の鳴く虫の採集方法から出来た言葉です。竹筒の片方に布切れをはり、虫を見つけたら、布のない方を虫にかぶせると、虫はおどろいて跳び上り、上の布にとまります。虫の入った方を、容器の中に入れて片方を布の外から吹くと、虫は容器の中に入るしかけです。



■虫撰

嘉保二年八月（一〇九五年）堀河天皇の勅令により虫撰の行事が始まりました。「殿上のをのことも、嵯峨野に向て、虫をとりて奉るべき由、みことのりありて、むらごの糸にかけたる虫の籠を下されたりければ……」とあり、大宮人たちが馬で名所に虫とりに出かけ、十町ほど歩いて、召使いの少年達が夕刻まで虫を捕って籠に入れ、萩や、女郎花などで飾って、中宮の御方へ差し上げた。献上後は、盃をかわし、朗詠などしたりしました。

